六塞室《むそくべや》

高居望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
六塞室（むそくべや）

【Ｎコード】
Ｎ６８５２Ｚ

【作者名】
高居望

【あらすじ】
――現状を把握する、それは確かに大事だ。でも順序が違う。もっと先にすることがある

――彼は焦りとサボタージュは同程度の罪であると考えていた

――そろそろ核心に迫りますが

知らない場所に互いを知らない六人。だれがどうしてこんなこと

をしたのか……　次々と押し寄せる展開に六人はただ流されるだけなのか……　それとも……

序

一日を文字に置き換えたらどれくらいだろう？　そう問われたらなんて返すだろう。

俺だったらこう即答する。「それはもちろん、漢字で二文字、ひらがななら四文字」だと。「ローマ字なら七文字かな」なんて付け加えてもいい。その他諸外国の言葉で表せばひょっとしたら十文字ぐらいは越えるのかもしれないが、それはくどいだろう。面白いものは好きだけど、くどいものは嫌いだ。

おっと失礼、気を悪くしたかな。こんなものはとるに足らない、言うならば本題に入る前の冗談ってやつだ。俺としてはメインに移る前の出だしってやつは、こういうとんちめいたものがふさわしいと思うのだけど、それはあくまで俺の考え。そうは思わない人もいるだろうし、また僕はそういう存在を認める心を持っているということを示すために、前置きはこれくらいにしておこうか。なんて、本当にそう思っているのなら出だしを言い直すべきなのだろうが、それはしない。なんだかんだで、この言い回しが気に入っているからだ。いつか別の場所でも使うかもしれない。

っと失礼、話がそれた。では本題。ここからは聞き流さないでほしい。

一日で起きたこと、感じたこと、それを読んだ人が作者の一日を理解できるような話を書いたら、いったい何文字に相当する？　そう聞かれたらなんて答えるだろう。いったん目を閉じて考えてみてくれ。

自分なりの意見を持って、それと俺の持論を比べてみてほしい。それじゃあ、その持論を話そうか。

俺なら「それは人による」だ。ここで三八文字なんていう輩がい

たら、そいつには笑いのセンスがない。さっきと同じネタだし、何より本当に三八文字か確認するのに手間がかかる。一、二、三……と、なるほど三八文字だ。そんな発言をしておいて文字数が違ったら笑ってやろうと思っていたけど、数え上げぐらいはできていたか。というより、そもそもそんな発言をしたやつが俺の妄想上の人物なのだから、まったく意味のない話だった。

人によって違う。それに戻るけど、本当にその通りだろう。そんな答えがあるものか、と思う人には逆に問いたい。それなら、何文字なのかと。

人によって違う。個人の世界を見る目によって大きく作用するだろうし、さらに言えば、起きた出来事をどの程度正確に表現するかでもかなり変動する。それこそ桁が変わるだろう。

朝起きて夜寝ました。で終わらせる人だっているのかもしれない。俺としては、そんな人には次の朝が来ないことを切に願うけど。そんな文字を読ませた作者を呪うだろうけど。

本題と言いつつわき道にそれる。そんなさりげない悪ふざけもそろそろよそう。これは俺がふざけるために語っているんじゃなくて、君に聞いてもらうためのものなのだから。俺だけが楽しんでも仕方がない。

肝心なのは俺の場合だ。散々君に問うてみたが、結局のところ俺の話を聞かせる前不利に過ぎなかったのだ。

俺の一日の場合、俺の十二月二十四日の場合、俺が自分で書いた場合。今大切なのはそれだけ。

余計なことを言い出して君をうんざりさないうちに答えてしまおう。それはきっと、本一冊分にはなるんじゃないかなと思う。たぶんそうだろうな、と思う。

どうしてそんなに自信なさそうに言うのかって？　それは……これを聞いて君が続きを聞く気をなくすかもしれないから、できれば黙っておきたかったのだけれど。聞かれてしまったなら仕方がない、せめて誠意が伝わるように答えるとしよう。

それは、俺もまだ数えたことがないからだ。なんていったって、これから語る話自体も、今君に初めて話すつもりなのだから。出来立てどころか、未完成品とも言えない、未創作品とでも言うものだ。

先に言っておくが、これは本じゃない。文字数にすれば本一冊分とは言ったけど、それはあくまでたとえ。これは既に書いて推敲を重ねた紙の束なんかじゃなく、俺のたどたどしい語彙で今リアルタイムで君に送る身の上話。文法がめちゃくちゃだったり、間違った言葉を使ったりするかもしれない。時系列や登場人物を正しく伝えるぐらいは気をつけるつもりだけど、それも百パーセント保障するとはいえない。リアルタイムだから、何が起きるかわからない。ひょっとしたらこの話を最後まで語る前に俺は死んでしまうかもしれない。いや、本心からそう信じているわけではないが、それくらいのことが起きても驚かないでほしいということだ。

こういう不安材料はできれば隠しておきたかったのだけど、まぁいずれはばれることだったろうから仕方ない。さすがに話を作りながらよどみなく違和感なく伝えるのは無理だとわかっていた。コそれくらいはわかっていた。ーヒーを頻繁に飲んだりして時間稼ぎをすることは間違えないから、鋭い君なら、たとえ今伝えなくとも感づいていただろう。

どうせ気づかれるのなら先に伝えておいてよかった、とでも考えておこう。ポジティブシンキングは生きてく上でそこそこ重要だ。一番ではないが、そこそこは重要だ。

では一番は何なのか……　っと、もう無駄話はよそう。俺はこれを無駄話とはまったく思っていなかったりするが、俺だって空気は読める。君のあからさまに面倒そうな感じは伝わっている。だから、これはまた次の機会にでも。ってことにしておこう。

最後にもうひとつ、一方的なお願いばかりしてすまないが、もうひとつだけ頼んでおきたいことがある。とりあえず聞くだけ聞いてみてくれ。

余裕があったらでいい、大変だと思ったらすぐにほっぽりだして

もらってかまわないが、一応お願いしておく。今から語る俺の話、それが何文字だったのか最後に教えてもらえないか？

……そうか。そうだな、いや、これはこちらが悪かった。そんなことをしながら話に集中できるはずもないか。いや、忘れてくれ。君のことを一切考えていない、自分勝手にもほどがある発言だった。

俺が次にこれを語る人へは、せめて文字数ぐらいは教えてやりたかったのだが……　それは自分でどうにかするとしよう。

お待たせした。それじゃあ話そうか。俺の一日、ある年の十二月二十四日を。

・・

一、０時０分

アラームが鳴り響いている。日付が十二月二十四日へ変わったそのとき、設定されていたアラームがジジジジとうなりをあげた。

それはその部屋にいる六人の男女の耳にも響く。それまで意識を失っているかのようにピクリとも動かなかった六つの体がひとつ、またひとつとわずかな動きを見せ始めた。

耳が痛くなるアラームが鳴り止むころには、六人全員が目を覚ました。突然うなったアラーム、それが普段の目覚ましとは、愛用の目覚ましの音とは違っていることに疑問を持ちながら、全員がその場に恐る恐る立ち上がった。

男が三人、女が三人。大人が三人、子供が三人。それぞれが部屋を見つめ互いを見つめ、そして……。

「何だ……これ……。どうなってんだ……」

全員の胸の内を声にしてあらわしたのは室町遷（むろまちうつし）。長身とガッチリ引き締まった体、普段ならすれ違うものに威圧感を与えるであろうその巨体はわずかに震えている。

彼らが今いるのはもちろんこの中の誰かの家ではない。一切面識のない彼らがそれを知るのは三十分後だが、それを三十分早く知ったところでどうこうなる問題でもないだろう。六人の中でこの場所に見覚えのあるものはいなかった。

「何、何なの？　どこなの？　ここは……」

夜坂真里（よざかまり）は冷静さを欠いて若干ヒステリックな声を上げる。見知

らぬ場所、どうしてここにいるのかわからない。多くの理不尽な謎が彼女の恐怖を掻き立てている。

「なんなんだ、どうなってるんだよ！」

部屋で最初に口を開いた大男、遷が怒鳴り声を上げる。近くにものがあったらきっと蹴り飛ばされていただろう。同室のメンバーに怒鳴っているのか、見えない誰かに叫んでいるのか……　もしかしたらその咆哮自体に意味はないのかもしれない。ただ怒鳴らずにはいられなかったのかもしれない、謎の状況が生み出す抑圧から目をそむけるために。雰囲気に、自分を包んでいる正体のわからない雰囲気から逃れるために。

なんだ、本当に、なんなんだ……

一度怒鳴ってからは、どしどしと荒い足音を立てて同じ場所を何度も行ったりきたりを繰り返す。見ず知らずの場所に見ず知らずの他人といる、その気味悪さを受け止められずに、ただただ暴れている子供のように見える。

そんな中、長石陽一（ながしよういち）は半ば放心しきっていた心を体へ戻し、自分の周囲をゆっくりと凝視する。

十六畳の正方形の部屋、ドアも窓も、外に出られそうなものはない。天井には一定の間隔で蛍光灯が設置されていて、彼の正面の壁側に五十インチの薄型テレビがひとつ置いてあるだけ。あとは一切何もない白い部屋。部屋のどの面も純白一色で塗られていて床と壁の境目がわかりにくく、実際の体積よりもかなり広いように感じる。

当然、出口はないよな……　なんだか頭が痛くなっていた……

悪い夢なら、早くさめて……

これが夢でないことはよくわかっている。現実としか思えないこの重苦しさ、夢であるはずがなかった。

次にこの部屋にいる人間、見知らぬ五人についてもこっそりと窺(うかが)う。

まず目に付くのは、正面右斜め、先ほどから怒鳴ったり動き回ったりでせわしない大男。年は三十後半ぐらい見える。隆々とした筋肉、短く刈りそろえた頭は何か威圧感を与えるものがる。

いつまでも見ていて目が合ってしまったらかなわないので、今度は視線を真正面へ向ける。

そこには一人の少女。意識を取り戻した直後こそ現状に動揺していたものの、今はただ静かに背後の壁に体重を預けている。肩までまっすぐに下ろされた黒髪、かわいらしいとも美しいとも表せる容貌。その表情からは今は恐れも焦りも感じられない、何か、今起きていることは自分とは関係がない、とでも言うような冷めた無表情だった。

と、陽一の視線に気づいてか、彼女もこちらに視線を向ける。そして、眉間にわずかにしわを寄せるとあさっての方向を向いてしまった。ジロジロ見るな、というサインらしい。

既に手遅れながらあわてて目線をずらして、高鳴った鼓動を静める。こういったリアルな感覚が、これは夢ではないという事実を裏付けているように感じた。

はぁ……　いったいなんなんだ……

正体のわからないため息が漏れる。未知の状況、陽一はその恐れで今すぐにも叫びだしたい気分だったが、自分と同じ状況にもかかわらずそれをしていない周囲を見ると、それははばかられた。一人、いつまでも動き回っている人もいたが、自分もそれに倣おうとは思わなかった。

幾度かの呼吸を経て、次は自分の三メートル右、自分と同じ壁に

寄り添っている男をこっそりと見る。さわやかな好青年、という印象が強い。何か考え事をしているようで、真剣な表情で少し下を向いている。

ここまで周囲を見回しても得られる情報がひとつもない。緊張しながらの観察に疲れた陽一はすっとまぶたを閉じてしまった。目をつぶることでの現実逃避。視界が真っ黒になっただけで現状は何も変わらないのに。

室内に再び正体のわからない重圧が広がってきて、再び怒鳴り声。発信者はまたしても遷。

「おい！　お前らも！　お前らも何なんだよ！　これは何かの悪ふざけか？　おい、何とか言えよ！！」

目を覚ましてから三分、悪い夢ならとっくに覚めているはずなのに自分は依然としてここにいる。その恐怖から目を背けるため、周りへの八つ当たりをはじめた。大男の咆哮におびえるものこそあれ、当然返答はない。

そのことが遷をさらに焦らせる。焦っている自分を、恐怖におびえている自分を認められずに、彼はたまたま近くにいた一人の少女のところへ肩を怒らせながら近づいていく。

「おい！　そこのお前だよ！　無視してんじゃねえぞ、コラ！！」

少女は無言で、怒鳴り声などなかったかのように静止している。目をつぶって自分を見ようともしない少女へ遷はがしがし近づいていく。顔ひとつ分でぶつかるところまで近づいて、もう一度でたらめに怒鳴りあげる。

「耳聞こえねぇのか？　こらぁ！」

それも白い空間にむなしく響くだけだった。青年が一人、静かに立ち上がる。

しつこく咆哮する遷に耐えかねてか、少女はようやくゆっくりと眼を開く。さめた瞳、遷も思わず後ろに下がりそうになる静かな瞳だった。遷をにらみつけるように、または遷なんて目に入っておらず、そのむこうにあるテレビを見ているかのように。その冷えた視線に遷がおびえたのも一瞬、何とか自分が優位に立とうとして、再び声を荒らげる。

「何にらんでんだ？　ふざけてんじゃねえぞ！　この不気味な小娘が！」

不気味な小娘。最後の一言で少女の表情に変化が。眉間にしわを寄せてあからさまな敵意を表す、動的な瞳。先ほどの静かな瞳とはまた違う迫力が備わっている。少女は続いて、その桃色の唇を動かす。

「うるさいんだけど」

「あぁ！？」

少し違う。遷は少女が普通とは少し違うことを悟り始めた。しかし抜いた鞘は収められない、半ばやけになってでたらめにわめく。その声は最初ほど迫力はなく、わずかに怯えが足されたように感じられる。

「う　る　さ　い　ん　だ　け　ど」

一字一句伝わるように、ゆっくりと正確に発音した。どんな低脳な人間でも聞き漏らさないように。

「てめぇ……　どうやら痛い目に会いたいようだな」

言葉での戦いでは勝ち目はない。鍛え上げられた両の腕をに力をこめ、力によって生意気な少女を屈服させようとしている。対する少女のほうはその浅ましさに再び目を閉じた。

「っっ！」

声にならない声を出して、遷はその豪腕を振り上げる。少女はただ目をつぶっている。自分とは関係のない外界をから自分を切り離すかのように。見ないことでいないことにしようとでもするかのように。

ガシッ

陽一はその恐ろしさに思わず目を背けた。続いて少女の悲鳴が聞こえる……　と思ったが。

「おいおい、落ち着きなって。そんなことしても何も意味ないだろ」

再びそちらへ目を向けると、先ほどの青年が太い腕を後ろからつかんでいた。予想外のことに驚いたのは腕を振り上げた本人も同じだった。ただ少女だけが静かに目を閉じていた。

「今ここで女の子を殴っても何も解決しない。そうじゃない？」

ニカッとさわやかに微笑む。場違いなほどさわやかな笑顔。

遷はばつの悪さを感じ、つかまれた手を振り払うと、フンッ、と言ってその場から離れる。少女は《女の子》と言われたことにピクリと反応を示したが、いまだに目をつぶったままだ。

嵐が収まった。陽一はほっとすると同時に、自分もとめに行くべきだったのではないか、と自責の念に駆られている。落ち着いて状況を確認していたつもりだったが、彼もまたこの場の雰囲気に怯えていたのだ。

「君もだよ」
さわやかな青年は、今度はまだ目をつぶっている少女に向けて話しかける。少女はゆっくり眼を開いた。静的な凄みも、動的な迫力もない、なんとも表現しがたい瞳。それは先ほどほどはさめていなかった。
「この状況、みんな声にこそ出さないものの心の中では怯えている。知らない場所、知らない人、どうしてここにいるのか、ってね。もちろん俺だって怯えている、怖がっている。君はもしかしたら違うのかもしれないけど、みんな怖いんだ。そんな状況でそういう態度をとったらどうなるかわからない？　そもそもそんなことしてもも何も得はないと思うけど？」
冷静に、しかし少し感情をこめて青年はそう言った。相手を威圧しないようにしながらも、しっかり相手に伝わるように。
「別に、大丈夫なんて言ってない」
壁にもたれかかったまま、ぼそりと小さく言った。
「ん？」
聞こえなかったのかもしれない。あるいは聞こえていたのかもしれない。青年の表情はすこしゆるくなった。
「別に……」
少女は繰り返さなかった。眉間にわずかにしわを寄せて、それでも先ほどのような白さはなく、自分に話しかける青年をジロッと見た。
「今一番重要なのは、現状の把握。ほえる犬の相手をすることじゃないと思うけど？」
そのやり取りを離れたところから見ていた遷は、何だと、てめぇ！　と怒鳴るが、それ以上のことはしない。数秒前に感じた気まずさが黒い感情を押しとめたようだ。
いまや全員が青年と少女の会話に見入っている。現状を忘れて、あるいは忘れるために、ただただ声援の次の言葉を待っている。

「違うね」

数秒の沈黙の後に響いたのはそんな音だった。青年は両手を広げて大げさな反応を見せる。

「現状を把握する、それは確かに大事だ。でも順序が違う。もっと先にすることがある」

少女が片眉を上げる。皆が彼の次の言葉を待っている。男は少し微笑んで続ける。

「今一番大事なのは俺たち六人が互いを知ることだ。知らない人間が同じ空間にいるってのは、それだけで圧迫を与える。思考の上でもかなりの障害になる」

見えない圧力が蔓延(まんえん)しているこの部屋で、それに異を唱えるものはいなかった。知らない人間が同じ部屋にいる、それが名前もわからないプレッシャーの正体だと青年は言う。

「それに知ってるかい……　状況は自分からは変わらない、それを変えるのは人間だ。君がたとえ今現在の状況をつかんでも、それは知らない誰かによって簡単に変えられてしまう。違うかい？」

「……」

少女は何も答えない。それでも、目を閉じることはしなかった。世界を切り離すことはしなかった。

「俺は遜場英輔(そんばえいすけ)、年は十九の大学二年。趣味は星を見ることかな。以上、これが見知らぬ人その一の自己紹介だ」

その部屋の全員に聞こえるように言った。見知らぬ人その一、英輔と名乗った見知らぬ青年のほうを見ている。室内の言いようもない圧力がひとつ消えた。

「こんな簡単な紹介ですべてが伝わるとは思わない。それでも、ほ

んの少しでも怖さが弱まらないか？　まずはこの部屋から見知らぬ人を消すこと。とりあえずそれからやってみないか？」
手のひらを上にして、すっと右手を伸ばす。指し示されたのはその正面にいる少女。
「次は君の番だぜ？」
さわやかにはにかむ。少女は一度ため息をついて、壁に任せていた体を前に動かし、一歩前に出る。

「鏡杏子（かがみきょうこ）……十六歳」

ぶっきらぼうに、必要最低限のことだけを告げた。英輔はニカッと笑い、よろしくな、と伸ばしていた手を彼女の近くへ。杏子は英輔の顔を見て、そして右手を出した。
その様子を見ていた遷はくしゃくしゃと頭をかいて、ぶっきらぼうな声で、

「オレは室町遷、三十五歳、土木関係の仕事をしている」

皆は一瞬目をしばたかせた。その雰囲気を察して
「自己紹介だろ。しかたねぇからつきあってやったんだよ。残りの奴もさっさとやって、この気持ち悪さを消してくれ」
再ほどのような威圧的な態度は消えている。改めて彼をみると、無骨ながらも心のある一人の人間がいた。
「あぁ、よろしく。室町さん」
英輔は彼のところまで行き握手を交わす。
「ほら、次はそこの坊主がやっちまえ」
指で鼻のかしらを書きながら、遷は少年に声をかける。照れ隠しからか声が少し大きくなっていたが、身がすくむようなそれではなかった。大男の発していた威圧感は、緊張感の薄れとともに小さくなっていった。

そして、眼鏡をかけた小柄な少年がそれに答える。

「えっと、長石陽一です。中学三年生、卓球部……です。あの、よろしくお願い、します」

ペコリと礼をして、息を吸った。いつの間にか息がしやすくなっていた。

それを見て、残る二人の女性のうち一人が片手を挙げ、そこから一歩前に出た。

「夜坂真里です。年は二十八、大学で助手をやっています」

すらっとした体系で知的な眼鏡をかけている。実年齢よりもずっと若く見えるその顔からはこわばりが取れていた。

皆の視線が自然と最後の一人に注ぐ。その視線集まる先、小さな女の子がひざを抱えて座っていた。

「最後は、君だよ」

ずっと小さく震えている女の子のところへ、英輔は歩んでいく。

ヒッ、と小さな悲鳴を上げて、自分に近づいてくる青年を恐る恐る見る。

「大丈夫？　立てるかい？」

威圧感を与えないように、女の子に目線を合わせて、そして手を差し出す。

女の子は少ししてこくりとうなずいて、差し出された英輔の手を小さな手でそっとつかむ。

「よっこいせっと」

ゆっくりと彼女を立たせて、英輔は女の子と同じ目線になるように再びしゃがんで話しかける。

「名前は？」

「西条彩香（さいじょうさやか）、です。小学校五年生……」

「怪我とかは、大丈夫？」

「は、はい……」

「そっか」

いまだに震えている彩香を見て、安心させるようにやさしく微笑む。

「あ、あのっ！」

「ん？」

「あ、よ……よろしく、お願いします」

「うん、よろしくね」

六人全員の自己紹介が終わった部屋には、十分前とはまったく違った空気が流れている。皆がそのことに気づき何か言おうとしたそのときに、ずっと沈黙していたテレビが光を放った。

「あ、テレビがっ！」

陽一が光をともしたテレビを指差す。皆がそれへ目を向ける。

「あー、あっあっ。この声が聞こえたら皆様どうかテレビの近くまで足をお運びください」

画面が現れると同時に、そんなアナウンスのような声がテレビから流れてきた。画面には白衣を着た中年の男。

テレビに映っている白衣を着た男が六人に、テレビに集まるようにそう告げた。部屋は沈黙する。また新しく現れた言いようのない圧力を感じながら。

「あ、あ。音声は届いていますね。皆様にこれからについての情報、第二段階の情報をお伝えしたいので、速やかにテレビに集まってください」

中年の男は事務的な声でそう繰り返す。れからについて、皆がこの言葉にわずかに反応したのを、テレビの向こうの男は見逃さない。
はじめに動いたのは杏子、テレビから一番遠く離れていた彼女が静かに動き出す。
「とりあえずテレビに集まろう」
英輔が声をかけて、全員がようやく動き出した。
「はい、ご苦労おかけします。現在時刻は十二時三十分。先ほどのアラームが十二時ちょうどなので、皆様は第一段階を三十分でクリアしたことになります。これは優秀な結果ですね……　実に優秀だ」
最後の一言にはわずかに感情がこもっていた。六人は沈黙する。第一段階、クリア、結果、ゲームのような単語が突然度日出してきて、全員が当惑している。

「続いて第二段階へ移らせていただきます」

波が収まらないうちにまた新たな波紋が投げられた。次々と進んでいく話に全員がおいてかれている。中年の男はこちらの意志などお構いなしという具合で再び口を開く。
「それでは……」

「あのー」

男をさえぎるように英輔が口を挟む。男は無表情で黙る。しばらくして、
「はい？　何か？」
こちらを慮っている様子は微塵も見られず、ただ英輔がこれから何を言うのか、それに興味を持っての返答だった。それでも、返答はされた。

「これからの説明って奴は？」

皆がはっとする。矢継ぎ早な言葉でうっかり忘れていた。確かに男は「皆様にこれからについての情報、第二段階についての情報をお伝えしたいので……」と言っていた。

「ほう。なかなかですね」

男は感心したように英輔を微笑みながら見る。観察でもするかのように、少しも笑っていないその目で。

「今のもひとつの実験です。あなた方が自分の意志を持って現状へ取り組めているか、ただ我々の言葉に場がされているのかのテストですね。前者には情報を、後者には嘲笑の後に情報を与えることになっているのですが……　久方ぶりの前者だ……」

男は紙に何かを書き込んでいる。何を書いているのかはまったくわからない。

「情報は文字でお送りいたします。私が口頭で説明するよりメリットは大きいでしょう。私には繰り返し同じことを読む忍耐力はありませんので、皆々様方で繰り返しお読みください」

それは男が説明するのが面倒なだけでは？　真里はそう感じたが実際に言う勇気はなかった。

「久方の知恵のある方のご来室を祝して、特別賞を差し上げましょう。一人ひとつ、食料を除く小道具をお貸しいたしましょう。ただし、武器などの危険なものはお控えください。今から六十秒以内にどうぞ」

テレビ画面が残り時間を見せる。一秒一秒と減っていくそれを見て遷があせる。

「おいっ！　どうすんだよ、これ！」

「落ち着いこう。時間はまだあるからっ」

英輔が大きな声でそう言った。皆がそれに驚き、自分があせっていたことに気づき、心を落ち着ける。英輔が言葉を続ける。
「一人一つづつ考えて皆でまとめる時間はない。そこで、この六つの選択を夜坂さんに委任するのはどうかな？」
この状況でむやみに反対してチャンスを台無しにするものはいなかった。しかしただ一人、託された本人の真里だけが疑問をあらわにする。

「え？　……どうして私が？」

「悪いけど説明する余裕はない。とりあえず、適当でもいいから選んでほしい」
時間は残り二十秒。真里は言いたいことがあったが、仕方なくうなずく。
「それじゃあ、自分が昨日、たぶん昨日なはずだけど、寝る前に触っていた携帯以外のもを言って！」
意図のわからない質問が皆へ。残り時間十秒。皆はそれぞれが寝る前を思い出し、何とか時間内に全員が言いきる。

「……一分です。以上のものでよろしいですね？」
「はい」
真里が答える。陽一は本当にこんなものでいいのだろうかと思ったが、真里の自身のある表情、自分も彼女に託すと決めたこと、それらを考慮して口を開くことはなかった。
「では、五分後に約束の情報を書いた紙とそれらをお送りいたしますので、少々お待ちを」

ぷつり、と電源が落ちた。テレビの電源は向こうで操作できる仕組みらしい。
電源と同時に、室内の張り詰めていた緊張の糸も切れた。全員が軽くため息をつく。
「なぁ、ひとつ聞きたいんだが」
一呼吸して遷が口を開いた。彼は真里へ体を向けている。
「何でしょう？」
見知らぬ人ではなくなったにせよ、まだ知り合いというわけでもない。さらに相手が大男ともなれば、声に多少の警戒心が入ってしまうのも無理ないことだろう。遷は彼女の声の硬さには何も言わなかった。
「さっきの至急品の選考方法、あの時は時間がなかったから従ったが、それなりの理由はあるのか？　なかったとしても何も言わないが……」
遷は英輔のようにやさしい口調で話すことはできないので、なんとか言葉で威圧感を消そうとしている。真里は声を先ほどよりも柔らかくして、
「一応あります」
それを聞いて、陽一のその会話に耳を傾けた。
「まず、特別賞、名前は何でもいいのですが、あれは本来あるものではなかった。さらに最適な六つを選ぶ時間も足りなかった。この二つを考慮してください。先に言いますが、あの選択は別に最善というわけではありません」
「でも、悪くはない？」
英輔も会話に参加。真里はうなずく。
「あの六つはいうなればサポーターです。攻撃のためでもないし、

防御のためでもない。休息のためのものです」
　いつの間にか、全員が彼女の話を聞いている。彼女は続ける。
「自分が普段触っているもの、実際のそれでなくとも似たものでもいいんです。そういったものは心を落ち着かせてくれる。この状況、おそらく五分後にその一部でも知ることになるでしょうが、このように緊張が重なる状況では、何か心の支えになるものがあるとないとでは取れる行動、考えられる思考がぜんぜん違う。リラックスなんて……　と思うかもしれませんが、それはこういったときにこそ重要なものなんです」
「なるほど。でも、それなら寝る前に触ったものじゃなくて、もっと自分に身近なものを答えたほうが良かったんじゃないか」
　杏子も同じことを考えていた。思考があの大男と一緒だったことに、なんとなく苦い顔をする。

「そうですね。ではお聞きします、そばにあると一番安心するものはなんですか？」

　今度は真里から遷への問いかけ。
「あ、それは……　それは……」
　遷は答えらなかった。自分でも驚いているようで、再び考えてみるがすぐには思いつきそうにない。
「わかりましたか？　その質問にすぐに答えるのは、わずか十秒程度で答えるのは思いのほか難しいんです。もっと考えれば思いつくかもしれませんし、もしかしたらすぐに答えられう人もいるかもしれませんが、寝る前に触っていたもの、それを思い出すのに比べると難易度が上がってしまう」
「確かに……」
　無言の遷に代わって英輔が応える。陽一はさっき自分が口を挟まなくて良かった、余計なことをしなくて良かった、と胸をなでおろした。

「あの、次はあなたに質問をしたいんですが」
次は、真里が英輔に声をかけた。
「心理学の先生だろ」
英輔は質問される前に答えた。真里が、えっ？　と驚く。
「どうしてさっき夜坂さんに選択を託したか、それの答え」
質問を先読みされていた……　いいえ、そんなことより……　どうして、彼が私のことを……　私の専攻が心理学ってことを知って……

ゆれる真里の表情を見て、英輔はさわやかに笑う。
「俺、先生と同じ大学の生徒なんですよ。学部も心理学部だからっ先生を見ることも多くて、たまたま知ってただけ。ホームズみたいな推理からわかったんだったならかっこよかったかな」
英輔は少し恥ずかしそうに鼻をこする。
「生徒はたくさんいるから、先生が知らないのも無理はないと思うけど」
相手は覚えているのに自分は覚えていなかった、真里はそのことを謝ろうとおどおどしたので、英輔はさわやかにそう言った。
「おぃ、その話はそろそろいいか？　ひとつ言いたいことがあるんだが」
遷が少し声を低めて言う。手でこっちに来いと告げる。全員が遷の近くに集まった。
「さっきの男は五分後に、ちょうどそろそろなはずだが、この部屋

に送りに来るって言ってたよな。相手からの接触、これってここから出るチャンスじゃねえのか？　どう思う？」

遷は声をひそめて、テレビの置くの男に聞き取られないように言った。

「バカね」

真っ先に答えたのは杏子。腕を組んで一刀両断する。

「あぁ？」

遷は打って変わって声を荒らげた。

「どういう意味だ？　バカにしてんのかぁ？」

先ほどの意味のない喧嘩がまた繰り返されそうになる。その不穏な雰囲気を察して、

「ちょっと待った」

英輔がうなる遷を落ち着かせる。続いて、

「今のは君が悪いぜ」

今度は杏子に一言。杏子は眉をひそめる。

「何が悪いって言うの？　くだらない冗談を言っていたから、合いの手を返してあげただけじゃない」

くだらない冗談、自分の思い付きを総評された遷は穏やかでいられるはずがない。その気迫に彩香は震えだす。

「きみねぇ」

英輔はわずかに眉間にしわを寄せる。怒る遷に頭を下げる。

「室町さん、この子は俺が何とかするんで、四人で協力して脱出のチャンスを狙ってみてください」
　遷は納得できていないようだったが、今の状況、自分たちが脱出できるかもしれないチャンスのほうを優先した。
「わかった。お前はこの生意気なガキをどうにかしとけ」
　それに対して何か言おうとした杏子を手で制す。強固のほうは反発するタイミングを奪った英輔をにらみつける。
「何かあったとき一人だと危険だ、とりあえずアンタは坊主と一緒に向こうの過度へ行ってくれ。オレは対角に行く。配達はおそらく壁を通して行われるはずだから、何かが起こった壁に近いほうが何とか対処しよう」

　自分は彩香ちゃんのそばにいたほうがいい、あの子はこの人のことを怖がっているから、ペアを変えたほうがいい……

　真里はそう思ったがそれを言う余裕はなく、仕方なくうなずいた。それが過ちだと言うことは、ことが起きる前の彼女に気づけるはずはなかった。彼女に限らず、誰にも……
　六人が三グループに分かれた途端、天井から何か音が。真っ先に気づいたのは陽一だったが、それでも既に手遅れだった。

「天井からっ」

　陽一が何か言い終わる前に、ドシャッ、と硬いものが落ちることが部屋に鳴り響いた。耳をつんざめく、思わず目をつぶってしまう音だった。
　真里が悲鳴を上げようとしたが、それを許さないかのように、どこかのスピーカーから声が。
「あー、あー。それでは第二段階に移らせていただきます」

テレビの中の男の声だった。不意な出来事の連続に全員が動くこともできない。
「なお、現状とこれからの情報は今落下してきた壁に貼り付けてあります。所望の品もそれぞれ本人に届けておりますね。こちらは約束を守りましたので、第二段階に移らせていただきます。とりあえず、その部屋はあと一分で爆発するので、紙と品を手に持って、速やかにご退室ください」
部屋は天井から落ちてきた壁で三つに区切られていた。英輔と杏子、真里と陽一、遷と彩香の三グループに分けられ、それぞれのスペースは壁の一部がいつの間にか変形していて奥に進めるようになっていた。後一分で爆発、分裂したグループ同士での相談もままならない状況。

「とりあえず今は従うしかない。早く奥へ進もう！」

ほかのスペースにも聞こえるように、英輔が声を張り上げた。
「は、早くしないと……　爆発って……」
陽一は口ではそういいながらも、腰がぬけてしまったかのようにまったく動けないでいる。
「偶然だが、大人と子供一人ずつのグループになってる。お前ら、ガキの面倒はしっかり見ろよ！」
お前らというのは英輔と真里だろう、それぞれが無言でうなずく。
「ほら、悪いが持ち上げるぞ」
キャ、と彩香の短い悲鳴が発されたが今はそれどころではない。
「君もっ。ほら、手、引っ張るよ！」
「あ……」
杏子は何か言いかけたが、英輔は力強くその腕を引っ張っていった。
「大丈夫っ？　まだ時間はあるから、肩を貸すからゆっくり行きま

しょう」
「あ、ｓ、すみません……」
大人たちが必要なものを回収して動けないでいる子供の手を引いていく。それぞれ別の見知らぬ場所へ……
全員が部屋を出るとその出口はふさがってしまった。そしてまもなく爆発音。爆発というのは脅しではなかった。
「これで第二段階スタートです、皆様御健闘を祈っております」
感情のこもらないアナウンスが、次なる未知、第二段階の始まりを告げた。

・・・

０時４２分

爆発の音と振動にビクリとしながら、二人は指示された一本の道を進んでいく。誘導された穴は一本の白い道につながっていた。人ひとりが通れる横幅、杏子が後ろを、英輔が彼女の手を引いて前を行く。杏子はただ英輔に引かれるがままに歩を進めている。先ほどまでの気の強さなど微塵も感じられない、今はただの少女のように見える。

三十秒も歩くとそれは突き当たりにぶつかった。白い壁が目の前をふさいでいる。壁には水色で矢印が書かれていて、それは二人から見て右を差していた。

それをたどるように右を向くと、またしても通路。白い一本の、先ほどよりは少し広いが、それでも二人が横並びに歩くのには不十分な道。

ここを、いけばいいのか？

指示が一切ないが、それ以外に道がない以上、文字通り道がない以上、それでいいのだろう。自分の足で動いているが自分の意志で動いているわけではない。そのことが、英輔の心にストレスを生むが、今はこの道を歩くほかに仕方がない。英輔はただ杏子の手を引いて歩くだけだった。

それにしてもこの子、どうしたんだろう……　もしかして、俺におびえている？　そうかもしれない。知らない男と二人きりでわけのわからないままにただ進んでいく、それに何も感じないほうがどうかしている。

隣の少女の異変を、このとき英輔は既に見抜いていた。それでも、ただの緊張だろうと、特にかまうことなく歩を進めた。

数分間、右に曲がったり左に曲がったりと単調な白い道を歩いて、二人はいま少し広まった場所にいる。道はそこで行き止まりだった。左の壁には三つの扉があり、中央の地面には大きく文字が書かれていた。

『この中から、ひとつの部屋をお選びください。扉を開くのはひとつだけ、二つ以上あけることのないように』

選択……　どれがベストかはわからない状態での選択。これは……

「これは心を揺さぶるためのものだ。どれが最善かわからない状態でひとつだけ選ばせて、残りの部屋は開示されない。つまり、どの部屋を選べばいいのかという答えのないストレスと、この部屋を選ばなければ良かったという根拠のないストレスを与える罠だ」

英輔は杏子に言い聞かせるように、または自身に言い聞かせるように言った。仕掛けの狙いを見抜いて、それで心理状態を安定させる、余裕を感じる、というひとつのテクニック。たとえ自分が従わされている状態においても、相手の意図を見抜くことで、それを承知でしたがっていることで、心に余裕が生まれる。それを意図的に生むのが英輔のやり方だ。

もし、そんな小手先は不必要と思う人間がいたとしたら、それは逆境を経験したことのない、またそれが訪れたときに対処できないタイプだ。心理が体に及ぼす影響を軽く見すぎている。それは慢心では足りず、無知というより、無恥と評価されても仕方のない思想だ。見えないからといって、心をなめてはいけない。

「だから、ここは思い切って今すぐにで決めてしまおう。目をつむっていてくれ。俺が決めてしまうから」

どれがいいか考えてはいけない、とは言ってもそれを事前に知ら

なかった、今はじめて知った杏子にはまず無理だ。教訓は失敗を経て得るものだ、伝聞で会得できるものではない。だから目をつむってもらい、杏子に選択をさせない、公開をさせないという方法をとることにした。それは不自由を押し付けることかもしれないが、自由を与えることがプラスとは限らない。人間は自分で扱いきれる空間の中で、不自由に覆われた中のちょっとした空白を自由と呼んでいるのだから。

彼女は無言でそれに従った。英輔は三つのうち、右の扉を選ぶ。勢いに任せて、考慮なんてしないで、その扉を開いた。

扉の向こうは異常に小さな部屋だった。

天井と壁と床の境目がゆるい曲線になっている白い部屋。高さ二メートル、横幅一メートル、奥行きは八十センチほど、部屋には透き通ったガラス製の机がひとつ置いてあり、人が二人はいれば密着しないのは難しいほどの狭さ。

状況に動揺しないと決めていても、これはさすがに心を揺さぶられずにはいられなかった。扉を開く音で目を開いた杏子も、英輔の握っていた手に少し力を加えた。声こそ出さなかったが、心中では驚きを発していただろう。

なんだこれは？　広い部屋の次は狭い部屋か？

英輔が心中で解けるはずのない疑問を浮かべていると、突然どこかからアナウンスが。あの部屋でのテレビの男の声ではなかった。もう少し若々しい、青年のような声。

「さ、どうぞ。第二段階はその部屋で行われます。速やかに御入室ください」

御入室ください、そう唐突に言われても、予想外の部屋、この奇妙な光景に目を奪われていることで、二人の足はいまだに動かない。

「えー、爆破等の手荒いことは控えたいので、お早めにお願いしま

す」
　爆破。アナウンスは言葉面はこちらへの要望だが、先ほどの経験を経た二人にとってそれは明らかな脅しだった。再ほどの爆発、体への振動がまだ残っている。恐怖をあおるのには十分過ぎるものだった。
　英輔は頭を振ってから中へ入り、杏子も彼に引かれて入室する。非常に狭い室内のため、二人が入ったときには既に肩と肩が触れ合っていた。
「ご協力ありがとうございます。これから第二段階を開始させていただきますが、詳細は先ほどの用紙をご確認ください。質問等は第二段階終了後に受け付けます」
　つまり、質問はできないってことか。アナウンスの言い方に若干の苛立ちを覚える英輔。それでも言葉は発さなかった。
「入り口が閉まります。ご注意ください」
　アナウンスが終わると同時に、二人の入った入り口が奇妙に閉じていく。紙粘土を広げているかのような壁の動き方は少し気味が悪い。
「それでは、これにて放送を終了します。第二段階が終了し次第、改めてアナウンスを入れさせていただきます。なお、その部屋は少しづつ容積を減らしていきますのでご注意ください。六時間以上中から出られない場合は完全に動けなくなるとお考えください。扉が再び開く条件も第二段階を終えることですので、御健闘をお祈りいたします」
　部屋が縮む。不可解なことを言い残して、アナウンスは終了を告げる。
　無機質な祈りがささげられた後、プツリ、と放送の切れる音がした。それを境にして部屋から一切の音が消えた。
「……」
「……」

無音の真っ白な部屋。二人は無言で正面、ガラスの机とそれに乗せてあるあれこれを見ている。お菓子、飲み物、おにぎり……　小腹を満たすための飲食物がおいてあるが、今それに手を伸ばすことはなかった。今はそれどころではない……　今は……

二人は、ほとんど面識のない相手と肌が触れ合うほどの距離での座っている。数十分前に名前と年を知ったぐらいの、ほとんど面識のない、赤の他人……

他人が自分の空間にいる、他人を受け入れない空間を互いに占めている、侵入していることの罰の悪さ、侵入されていることの気分の悪さが二人をもやっと包んでいる。触れ合っている部分からくる人の温かさも、隣に人がいることを大声で主張している。それを意識してしまうと、その声に耳を貸してしまうと、お互い自然と体に力が入り、呼吸の音さえ相手に聞こえる気がして、それを聞かれるのが恥ずかしい気がしてうまくできない。

ここはさっきとは違う、人との間に壁をはれない……

じっとしている英輔の傍ら、杏子も外から見れば少し体に力が入っているだけだったが、頭と心はめまぐるしく動き回っていた。見た目は冷静を装って、いつもどおり壁に隠れていると相手をごまかして、自分もごまかして、それでもそれができないから思考だけがめまぐるしく動き回っている。

壁を作れない、この人と私の間に作る空間がない……

杏子はさまざまな感情を心中に浮かべる。その中でもひときわ目立つものが、焦り。いつも自分を囲むように作っている心の壁が使えないことが、相手が怒鳴ったって笑ったって自分には関係ない、そう思うための壁を作るスペースがないほどに英輔と近くにいるこ

とが彼女を焦らせる。普段は自分を脅威から守ってくれる、相手の声を、相手の存在をぼやけさせるバリアがないことに、彼女はおびえている。

今話しかけられたら……　いつものように飄々として、なんでもないっていう風にできない……　それは、ダメ……

彼女は英輔が何も話しかけてこないことを祈った。声に出さず、心の中で。大気は震わせず、心を震わせて。

「……」
「……」

沈黙は続く。杏子の願いどおり、沈黙は続いた。杏子はそれにほっとすると同時に、それに相反する願望も抱いてしまう。本当はそれを望んでいたはずなのに、それでも沈黙が続くと、杏子は矛盾した思いを抱き始めた。

話がなくていい。それなら壁がなくても大丈夫。でも……

次に浮かんできたのは、この状況の、この沈黙の不安。壁は相手のアクションを鈍くして受信するためだけのものではなかった。自分の心もまた、それによってごまかされていた。寂しさ、一人でいる孤独、あちこちにあふれている不安、それらをあまり感じないように、それらを感じてまた寂しくなる、不安になる、その連鎖から抜け出すための、否、逃げ出すために必要な壁でもあったのだ。それが今は、ない。作ることができない。

杏子は胸中の矛盾をごまかすために何か考えようとする。矛盾以外のことを、外に目を向けようと、目を背けようとする逃避思考。しかし、何か、と言っても選択肢なんてほとんどない。この状態で

は、緊張した頭では、直前のことを思い出すだけで精一杯だ。それ以上は難しい。
直前……　アナウンスの男が言っていたことを再生する。今をごまかすために、振り返る。
……部屋の容積が減る。そう、あの声は確かそう言っていた。
普通なら部屋が小さくなるなんてありえない。普通なら……。
でも、既にありえないこと続けている今、『普通』が土台から抜け落ちている今、そんな常識論で簡単に否定することはできなかった。普通なんていうのはルールが変わればまるっきり変わる。
だからあたしは、どんなときでもあたしを守ってくれる壁の内側にいる……　変わる周りから一人になれるように、自分だけは変わらないでいられるように……
壁、杏子の思考はそれに回帰する。どこへ歩を進めても最後にはそこへ戻ってきてしまう。それほどに、杏子にとって心の壁は、ずっと隠れていた巨大な壁は、彼女の根幹に位置するものだった。根幹が喪失した今、その大きな穴から目を背けることはできなかった。気づかないふりでやり過ごせる違和感ではない、目を瞑ったところで見えなくなる黒でもない。それにどれだけ自分が頼ってきたのか、それを認識しているからこそ喪失は目立つ。その不安も、怯えも、壁に防がれることなく外へ放射される。
それは隣にも届いていた。今となりにいる、杏子の異変に気づきながらも気づかないふりをしている英輔にも、彼女を慮って無言を続けている英輔にも届いていたが、それを悟る余裕さえ、彼女にはなかった。
壁に囲まれて、一人でいたいだけなのに……

彼女の思考は現状から遠ざかり、普段の日常へと旅立っていったが、それが彼女の心を落ち着かせることはなかった。

「ん、えっと……」

十分ほどの沈黙を経て、英輔が言葉を発した。当然彼は杏子の様に現状に焦り、現状を忘れるために思考をめぐらしていたわけではない。彼は焦りとサボタージュは同程度の罪であると考えていた。どちらも結果を残すことはないから。

彼は一人で静かに、十分ほどの時間を使って三つのことを確認していた。

部屋の縮む具合と、第二段階の達成条件と、そして杏子の変異。

部屋の縮む具合はわからなかった。認識できる速度ではないのだろう、アナウンスが告げていた六時間、というタイムリミットは信用していい証拠にはならないが、おそらくその程度の猶予は残されていると思った。

第二段階の達成条件は、既に目を通した。俺の仮説を、そうであってほしくないという最悪の予想を裏付けるものであったが、そんなことより。そんなことよりだ。

杏子のこの部屋に入ってから、いや、この部屋に入る以前、杏子が黙って自分に手を引かれていた時からの異常に彼は気づいていた。それがどんどん加速して、今ではもう、自分が見るまでもなく誰が見ても明らかにおびえている。

さっきまでとはまるで別人じゃないか。あの大男に怒鳴られてもまったく動揺していなかった彼女と、俺にも生意気な小娘のように反論していた彼女と、今隣で明らかにおびえている彼女と。まるで違う。同じ人間かと疑うほどに違う。

いまさらながら、英輔は杏子の年齢を思い出す。『鏡杏子（かがみきょうこ）……十六歳』そう言っていた。英輔は自分が促して彼女が言った言葉を思い返す。いまさらながら、それをきちんと認識する。十六歳という、その年齢を。

十六、十六歳なんだ。まだ、まだ高校生になったばかりだぞ。まだ、彼女はまだ十六なのに。

見た目で、あの大人びた態度でつい見えていなかったが、とんでもない思い違いをしていたが、この子はまだ少女なんだ。少女と呼ばれることに不満を表す、それでもまだどうしようもなく少女なんだ。

怖いだろうに。不安だろうに。泣きたいだろうに。それを見せずに、心を隠すように、自分を世界から隠すように、世界を自分から隠すように、彼女は振舞っていた。今、それができなくなっている今から思い返せば、ひどくこっけいで、痛々しい振る舞いだった。そして、何よりも悲しい振る舞いだった。

どうして、社会の厳しさを骨の隋まで知って折れた老人のような、自分と世界が何のかかわりもないことを悟った中年のような、長い長い絶望の終わりで至ってしまう『世界を見ない』ということを彼女がやっている？　心がかれて、魂は干からびて、周りには誰もいなくて、不安も不満も、感情という感情を伝えられなくなって最後にいたるものに、こんな少女が陥っている？　この子の周りは何をしていた？　どうしてこんなことになっている？

どうして、そんなことが。なにより、どうして、どうして俺は、今になるまで、彼女がそれができなくなってしまうまで気づかなかった？　兆候なら数え切れないほど、何兆といってもいいほどあったろうに。

そんな子を守るために、そんな子に気づいてやるために、見えない心を見てやれるために、俺は今までそれを目指してきたはずなの

に……　こんなぎりぎりになるまで、彼女がもうだめになってしまう寸前まで気がつけなかったんだ。どうして……

結局俺は何一つ変わっていないってことなのか？　あれだけ後悔して、後悔してももうどうにもならないことがあるってのを知って、涙なんてかれるくらい流したのに……

英輔は自分を責める。かつての失敗を、もう二度とこんなことになってほしくないという思いがまったく生かされていなかったことに。戒めにまったく戒められていなかったことに。

こんなことが、こんなことをなくすために自分は生きているのに。自分のすぐ近くにいる子がそうなっていたことに、いまさらになるまで気がつかないなんて、そう自分を責めている。

ただ責めて責めて、何かをこらえられなくなって、目頭が熱くなってきた。じわじわとそれは広がって、何かがこぼれそうになった。枯れたと思っていた何かがまだ息を持っていて、自然と零れ落ちそうになった。

また繰り返すだけなのか？　経験から何の教訓も学ばないままにもう戻らないものを失って、それにただ自分の無力を思い知るだけで……

英輔もまた、外から見る限りにおいてはただ前を向いているようにしか見えない。それでも、注意深く見ると、彼の瞳は自責の念を映し出していて、底の見えない悲しい感情がありのままに浮かんでいた。英輔は上を見て、その低い天井を見て、それから隣を見た。一人苦しんできた少女を見た。心の壁を通さない、本当の彼女の姿を見た。

この子は、泣かないんだな。こんな状況になっても、心を閉じていられなくなっても、泣くことはしないんだな。涙を流せば、たと

えそれがまやかしだとしても、一時的なものだとしても、急速を得られるのに……　彼女はそれを選ばない……

英輔は噴出す感情をこらえた。自分が休むためにこぼそうとしていた、彼女のためのふりをした自分のための涙を抑えた。

涙を流して楽になりたいとは思った。それでも自分がそれを流すのは卑怯だって、それはただ自分が人間であることを自分で確認したいだけのとても身勝手な振る舞いだって、自分より泣きたいはずのこの子をおいて、どうして自分がそんなことできるんだって、英輔はそれを必死にこらえた。それで自分だけがすっきりすればいいのかって、そんな自己満足で終わらせていいのかって、彼は自分に問うている。

まだ、終わりじゃない。ギリギリでも、寸前でも、まだ、終わりじゃない。心が、魂はまだ彼女の中にある。彼女はまだ、終わっていない。俺はまだ、終わっていない。

熱い何かを胸の奥へ戻して、これを流すのは最後に彼女と一緒にだって戻して、英輔は瞳に光を取り戻した。始まりの色が、決意の色がはっきりと現れている。

まだだ。いまから、これからでも、この子に向き合える。まだこの子は心が枯れたわけじゃない、魂が干からびているわけでもない。それは、瞳を見ればわかる。弱いながらも、光がないわけじゃない。

この子は、心がなくなる前に壁を作ったんだ。だから、まだ心はあって、彼女の生き方が問題なだけで、昔の失敗のときとはぜんぜん違う。

おこがましいといわれるかもしれないけど、それこそ自分勝手だとののしられるかもしれないけど、俺は彼女を救いたい。今度こそ、

絶対に。そのためにがんばってきたのだから……

「そういえば、君は寝る前にどうしてそれを使っていたんだい？」

英輔は前を向いたまま尋ねる。いつもどおりの調子で、詰問ではなく質問で。決意なんて微塵も感じられない、普通としか言いようのないトーンで。

英輔は自覚していた。自分の葛藤で至った解答へまっすぐに突き進んではいけないことを。自分の善意という勝手をいきなり押し付けることが、相手にとってどれほど不快なものか承知していた。自分がそれを決意したからといって、彼女は依然として心の中で震えているままなのだから。　心の奥で震えているままなのだから。思ったことを思ったままにやって思った結果がくるというのは間違いだ。だから、俺は今までがんばってきたのだから。

彼女の心を慮って、彼女の心にあわせて、一緒に歩き出して。引っ張るんじゃなくて一緒に歩いて、独善じゃなくて彼女の意志の元で。俺が突っ走るのはまだ早い。

だから、彼は心を落ち着けて、それでも心に決めたことはその中心に焼き付けて、普通の調子でやさしく尋ねた。

「……これ？」

十秒の沈黙の後、彼女はいつもどおりを振舞って、それでもぜんぜんできていない返答を返した。

声が少し裏返った、それに杏子は顔を赤くするが、英輔がこちらへ視線を向けていないことを横目で確認して安心する。返事をしないことはしなかった。普段の彼女なら、心の壁越しに人を見る彼女ならそうしていただろうに。

「そう、それ」

杏子が体と脚ではさんでいた、体で包むようにして持っていたそれは、青いノートと筆箱だった。支給は一人ひとつだったはずだが、

二つあわせて一セットとして数えられたらしい。英輔は彼女の返事を待つ。せかすことも、言葉を重ねることもなく、ただ待った。
杏子はすぐには返事をしない。ただ目があちこちに動いている。それは答えにくいからなのか、この状況に緊張しているからなのか。
英輔は正直に言えば、彼女が寝る前にそれを使っていた理由にそれほど興味があるわけではなかった。
この問いは、いうなればウォーミングアップ。杏子のためのウォーミングアップであり、英輔のためのそれでもあった。これは緊張をほぐすための、彼女とコミュニティを築くためのものだった。それが今一番大事な、英輔が彼女を不安定の淵から引っ張るためにも必要なものだったから。

異常に狭い空間でこれからおそらく四時間近くともに過ごさなければならない。あまりに理不尽なことだが、文句を言う相手もいないのだからどうしようもない。文句を言っても時間が過ぎるだけ、現状は受け入れよう。
その状況で最も求められることは、早く第二段階とやらに取り組むこと、ではない。すぐさまに、彼女の陥った絶望を読み解いて、それを自分が解決すること、でもない。求められることは、すべきことは相手との関係を少しでも深めること。何よりも第一優先に。
自分が抱いた感情を人にも押し付けるのは自分勝手だ。俺は彼女に過去の自分の失敗を見て、それを何とかしてやりたいと思っている。でも、彼女は俺の決意を知っているわけでも、俺に頼んだわけでもない。土台、人の問題を俺が解決してやろう、そう思うことが既に独善的で滑稽だ。これは彼女の問題で、俺はその手伝いをしたい、それが本当の、独りよがりでない俺の立ち位置だ。いや、それだって、彼女に願われてから、了承されてからの話だ。まずは、彼女と関係を結ぶ。それが何よりも大事だ。
それに実際問題、彼女を救うどうこうと言うまえに、それは、彼

女と人と人の結びを築くのは、通っておかなければならないプロセスだ。何時間か後に手遅れになる前に。

今はまだいい。肌が触れ合っているとはいえ、まだ一人ひとりが地に座っていられる。だが、この先は、あと二、三時間もしたらそうではなくなる。より密着せざるを得なくなる。

大して知らない相手と普通ならありえない密着状態になる。俺がどれだけ彼女について思っていたところで、俺達はまだ他人同士なのだ。とにかくそうなったとき、俺たちはまともな思考はできなくなるだろう。知らない人間と今以上にくっつかなければならない、想像するだけでその後はわかる。頭は固まり、思考はとまり、そしてタイムアップ、身動きが取れなくなる。第二段階のタイムアップ、彼女を助けられる最後のチャンスの終了。

彼女への質問はそれを回避するためのものだ。つまり、できるだけ早いうちに彼女との距離を縮める。実際の距離が取り返しのつかないものになる前に、心の距離を少しでも縮めること。それが英輔の狙い。

だが、そんなことをしてもいずれ思考のとまる状況に陥ることになる。ただそうなるまでの時間が延びるだけで。つまり、これは最善の手段ではあるが、現状を解決するものではない。と思うのは軽率だ。

あくまで仮説だが、二人が今よりも心の距離を縮めることには、より多くの意味がある。

実は、英輔にはひとつの仮説があった。第一段階終了、そう言われたときにふと浮かんだストーリーが。

これは、自分たちが今行わされている何かは、精神に関係する実験なのではないか。精神、心理に関する実験、そう予想できる材料が、その予想の必要条件ならそろっている。

その仮説が生まれたきっかけは第一段階終了時。

あの時はただのこじつけのような仮説だったが、それでも確かに

俺の頭に現れた。トリガーは自己紹介だ。
自己紹介。人と人がコミュニティを築くための第一歩。いうなれば関係の卵。
完全に知らない相手に自己紹介すること、それがあの状況で一番大事なことだと思い提案したことだったが、その自己紹介が第一段階として設定されている。そこに何かの必然性を考えてもおかしくはないだろう。
三十分……　男の告げていたタイムもその裏づけになる。あの男は間違えなく時間をはかっていた。未知の状況で、知らない人間が知らない空間で、互いにコミュニケーションを取り合うまでの時間をはかっていた。あれは、サンプル回収ではないのか。人間が動物を使って行うように、あの男は俺たちを使って、「異常状況での人間のコミュニケーション」、名前なんてどうでもいいが、そういった実験を行っているのではないか。
そして、その仮説は今確信となっている。第二段階の達成条件、先ほどはないがしろにしていたが、彼女の異変を優先したために後回しにされていたが、英輔はそれを既に読んでいる。
そういう御伽噺のような考えが、真実が生まれるかもしれない卵をあの時拾った。中身の一わからなかった〈、、、、、、〉卵。
それがあたりの卵だとわかったのが、この部屋に入った三分後。第二段階の達成条件を見たとき、想像は確信へと、仮説は真実へと変わった。ないがしろにされていたものの、第二段階の達成条件は決して価値の低い情報ではなかった。「相手と自分の共通点を見つける」またしても心理に関わる条件だった。
だから、今杏子とコミュニティを築こうとしている。二人の共通点、それに気づくために築く。

「……」
英輔が一人考え事をしている間、杏子は何も言わなかった。英輔

は最初、自分の思考がまとまるのを待ってくれていたのだと思ったが、彼女がエスパーでない限りそれは不可能なことに気づいた。
ちらっと杏子のほうを見る。一瞬の視界に映ったのは赤面する杏子。
顔を赤くしたままノートと筆箱をぎゅっと握り、ときおり口をあけたかと思うとまた硬く閉じてしまう。
「言いたくない？」
沈黙は緊張を生む。相手は今考えているのだから……　なんて待つのは愚の骨頂。英輔はできるだけやさしい声で尋ねる。
「…そういう…わけ…じゃ…」
杏子は口ごもる。何か言いたくないことがあるような、それでも言わないとは決められないような、彼女は迷っていると英輔は思った。絶望の淵で、限界状態で彼女は思考している。ただの沈黙でないときは、無理に自分が口を挟むのは控えたほうがいい。数秒前と矛盾するようだが、今はそう思う。

別にやましいことではないけど、進んで人に話したいってわけでもない。自分のキャラとはあっていない趣味だって自覚しているから、家族にも弟にも言っていない自分だけの秘密。ずっと誰にも言っていない、これからも誰にも言わないと思っていた秘密。言って変な顔をされるなら、たとえ誰かに聞いてもらいたいと思ってもやっぱりいえなかった秘密。
それを今日あったばかりの相手に教えるのは……　でもこのまま黙っているのも……　いつものように冷めたふりをして、壁はないけどあるってふりをしてやり過ごそうかな……　でもそれだとまた無言が通いて、この人も気を悪くしてもう話しかけてこなくなって、狭い中二人なのに一人みたいになって……
彼女の頭の中は、どうしよう、ということでたくさんだったが、外から見るとただ黙っているだけに、心なしか不機嫌そうに見える

だけだった。彼女は損なことに、頭の中で考え事をしているとき、不機嫌にだまっている、と周りに思わせる雰囲気を出していた。そして今、隣には英輔がいる。

英輔は少し待ってから、彼女がだんだん不機嫌な顔になってきたのを確認する。これは悪手だったか……　少し緊張をほぐしておこうと思って尋ねた質問、相手が構えてしまってはかえって逆効果なので、この話はそれとなく終わらせて、別の切り口を探そうと思い、

「別に無理して……」

と言い切る前に彼女がぼそりとつぶやいた。密着している英輔が聞き逃すほどの小声で。

「お話……」

「え？」

よく聞き取れなかった。彼女はもう一度尋ねようとしたとき、杏子はさらに赤くなった顔でこちらを向いて、

「おとぎ話よ！　なんか文句あるんです…、あるわけ！？」

強固は激昂した。英輔の計画を木っ端微塵に打ち壊して、壁を通さない彼女の生の心が表に出た。

杏子は自分でもはっとする。でも、あの人の馬鹿にするような聞き返し方、「え？」って馬鹿にするように言ったことが、許せない。あたしが勇気を出して言ったことに、馬鹿にするように、馬鹿にするように！！

実際は英輔に馬鹿にした自覚は、また第三者から見てもその証拠は見当たらなかったが、杏子の現在の心理状態は、ちょっと押されただけで壊れてしまう今の状態は、強い自意識から得られる情報を信じきってしまっていた。

心はもうやめようといっているが、今のことは謝って、もう一度説明しようといっているが、壁がない今、心の壁がない今、踏み出した体はそのまま加速するだけ。とまることはできない。

英輔は彼女の気迫に押された。彼女が突然大声を出したことへの驚き、その内容への驚き。二つの驚きに直面して、彼は眼を見開い

たまま何も言わなかった。彼はまずは強固を落ち着かせようとあれこれ考えるが、そのことで沈黙を生んでしまった。沈黙は彼女によって、本来とはまったく違ったものに解釈される。

「ちょっと！　何も言わないってわけ？　あたしが話を書くのがそんなにおかしいわけ？　そんなことは自分でわかってるし余計なお世話よ！　笑いたいなら笑えばいいわ！　だいたい…　だいたい、人の話を聞くときはちゃんと顔を見なさいよ！　本当に失礼ね！！」

ひねりすぎた蛇口のようにたくさんの言葉を発する杏子。とりあえず落ち着かせなくては、ここで余計な体力を使わせないほうがいい。英輔はようやくなだめることを決めたが、もう既に遅かった。外から止められるのは十秒前までだった。

「あなたねっ！！　あなた…あたしがどういう気持ちで、どんなに決意して打ち明けたか、わかっているの！？　わかっていないでしょう！　お話、歌詞、あたしが書いちゃいけないって言うの！？　どうして！？　それくらい、好きなことを書くぐらい、別に誰にも見せていないんだから、それくらい！！　どうしてだめだって、お前に似合わないって、よく恥ずかしいこと書けるなって！！　そんなことが言えるわね！　傷つくのよ！　あたしだって、壁の中にいるからって、それでも人なんだから！　何も話さないからって、心がないわけじゃないんだから！！　表情に出さないからって、ロボットじゃないんだからっ！！　それなのに…　それなのにっ！！！」

途中からは、自分がかつて学校で言われたこと、中学二年生の時にクラスの男子に言われたことを、英輔にぶつけていた。普段周りから言われていること、お人形みたいとか、心が冷たそうとか、そういったあれこれも彼にぶつけていた。今の杏子はただただ感情をぶつけている、誰にもいえなかった気持ちを乱暴ながら表現している。

英輔は怒る風もなく、笑う風もなく、ただ静かに聞いていた。

何だ、まだまだ、ぜんぜん間に合うじゃないか。この子は、壁こ

そ作っていたものの、心はまだ残っている。驚くほどきれいに、助けの必要なんてないくらいにしっかり。ただ、心の壁に頼りすぎていただけで、それなしで生きることをやめていただけで。

英輔はまたしても目頭が熱くなった。今度は喜びのそれだったが、ぐっとこらえて引き戻した。

今はまだ、泣く時じゃない。まずは、この子を落ち着かせて、それからゆっくり、心の壁の話をしよう。

切迫した気持ちに包まれていた頭が、冷静なふりをしていたもののやはり焦っていた自分の心がゆっくりとおさまっていく。英輔はそれを実感する。彼女を落ち着かせる方法も勝手に頭に流れる。驚くほどスムーズに流れて、それを実行することも、今の英輔にならできる。

「いい加減、こっちを見なさいよっ！！！」

杏子は怒りをぶつけている。普段なら壁によってせき止められている、本当の気持ち。彼女が壁を作ってからずっとたまっていたさまざまな気持ち。英輔の変異に気づくことなどもちろんなく、もうどうやってもとめることのできない感情の爆発に完全に支配されていた。

英輔はさわやかに尋ねる。余裕とやさしさをもって、そして何より彼女のことを思って。

「そっち向くのか？」

「あ、ああ当たり前でしょう！！！」

杏子は大声で答える。怒鳴る必要のあるところではなかったが、彼女はスイッチのオンオフができなかったので、まるで怒っているような返答になってしまった。

「じゃあ、そっち向くけど」

ここからの筋道は立った。あとは臨機応変に細かく対応していけば、彼女との距離は縮まる。英輔はそうしたらどうなるかわかっていて振り向いた。計画通りに振舞った。
「はいよ」
返事が近い。杏子は英輔の声がやけに近いことに気がつく。今まで経験したことのない近であることに気がつく。
それもそのはずだ。
二十七センチ。英輔と杏子の瞳の距離。
あらかじめ予想していた英輔は何とかこらえるが、杏子の方はそうではなかった。
「ひゃっ！」
先ほどまでの怒りなどどこかへ消え去ったかのように、少女のように悲鳴を上げてあわてて後ろに下がろうとしたが、狭い空間ゆえにすぐに頭を打つ。
「きゃっ！」
続いて、打ったところを抑えようとして頭を前に倒す。だがそこには、
「うわっ」
今度は英輔が驚く番。予測していてもやはり驚いてしまった。すごい勢いで自分に迫ってくる杏子。手で押さえるのは間に合わない。筋道どおりに、英輔は額を正面に向ける。
ゴツッ。鈍い音が部屋に響く。
「っつ～」
英輔は額をさする。迫ってくる杏子を額で対応した。俺はそこまで痛くなかったが、おそらく彼女は……
「……うっ　……ぐすっ」
杏子は一度鼻をすすったきり、ひざに顔をうずめて動かなくなってしまった。部屋にはかすかなすすり泣きの音だけが、いやにはっきり響いている。
「あ、あの……　あははっ！　すまんすまん、急に突撃してきたか

ら…ついな！」
何とか雰囲気を和ませようと無理やり明るく話しかける英輔。これも思考の再現。
反応はない。ただすすり泣きの音が響くのみ……
「大丈夫か～　はら、お菓子やるから、元気出せ！」
透き通ったガラスでできた机、部屋の空間を無意味に消費している机へ体を伸ばし、置いてあった饅頭の中から子供がすきそうなものを選ぶ。それを彼女へ手渡そうと再び体を戻そうとしたとき……
ガツッ、と派手な音が。
「いっっっつぁぁあ！！！」
零コンマ八秒後には男の叫び声が。枠組みの外から、計画の外からの急な現象に英輔は叫びながら驚く。人間は、計画通りに物事が運んでいたときに、急に予想外の出来事がが起きると、それに対して通常よりも過剰に反応してしまうものだが、英輔がまさにそれであった。
後頭部に生まれた謎の刺激を両手で押さえ、先ほどの杏子のごとき格好になる。首を丸めて、痛みの生まれた部分を体全体で包む。
数秒の沈黙を経て、英輔はガッと後ろを向く。部屋にいる人数から犯人は既にわかっているのだが、それでも勢いよく振り向いた。
その先には、当然ながら彼女がいた。杏子が語ってで額を押さえながら、キッとにらんでいる。英輔の迫力にも劣らない、大部屋での遷の圧力にも負けないほどの怒りを露にしている。もう片方の握り締めているこぶしがおそらく襲撃の犯人だろう。
「おまっ……　なんてことすんだよ！」
さすがに英輔も少し怒る。計画を崩された恨みや、突然の襲撃に対する自然な怒りや、黙って飲み込めない感情を少しもらす。
俺はただお菓子をとってやろうとしただけなのに……
「それはこっちのせりふよ！！」

額を押さえていた手をはずし、うす赤くはれている額を指差していっそうにらみつける。
「これ！！」
杏子は気が動転しているのか、たがが外れてしまったかのように怒鳴り始めた。本当にまだ間に合うんだろうか、なんて英輔も少し不安になってしまう怒りぶりだった。もちろん、まだ手遅れ手でないことは先ほど確信して、それはゆるぎなく残っているが。
「これアンタが自己防衛したせいでできたんだけど！　まずはそのことを謝るのが筋なんじゃないの！？　それなのに、ヘラヘラって馬鹿にしたように笑って……　そんなに面白かったって言うの？　まぁそりゃ面白いでしょうね、愉快だったでしょうね、気分もスカッとしたでしょうね！！　なんてったって！！　これ！！　こんなにずきずきするんだから！！　アンタ大学生って言ってたわよね、その年になっていまだに女の子をいじめて楽しんでるの！？　ホント、最低よそれ！　それにその饅頭！　あま～い饅頭って何よ！！
そんな幼稚園児が喜びそうな包装のデザインは何よ！！　そんなのであたしがアンタにされた仕打ちを忘れて一件落着ってなるとでも思ったの！？　そんなお子様お菓子じゃ、いえ、それがどんなものでも許すわけがないでしょ！！！　というか！！　というかまずあたしが話書いてることを笑ったのが許せないっ！！　そういう陰湿な嫌がらせが、創造の芽をつむんだからっ！！　このデストロイヤーがっ！！！！！」
たがの外れた本当の彼女。心の壁を取り払った、そのきれいな心。間違えなくて遅れではない、それをこれでもかと裏付けるものに、英輔は笑みをこぼすのをこらえて沈黙を選んだ。
英輔は黙っている。心での動揺を外からのぞくすべはないので、杏子からすると無視されているように見える。彼女の怒りはグングンと増幅されていく。
「あたしには返事もできないってことね！！　もういいわ、わかったわ！　だったらこっちも二度と話しかけないんだからっ！！」

プイ、とこちらから顔を背けたまま目をつむっている。そして体ごと向こうを向いて座ってしまった。狭いスペースなこともあり、それによって彼女は先ほどよりもより近づいているのだが、彼女はその姿勢を崩すつもりはないらしい。

目をつむるのは相手をしないってサインだったな……　ともうずっと前のような三十分前を思い出す。

こんな状況だが、杏子に拒絶の姿勢をとられて絶望的であろうこの状況だが、奇妙なことに英輔は少し笑っている。ひとつは、彼女はまだ大丈夫だ、心はまだあるし壁だってまだどうにかできる、そういう確信に対して。そしてもうひとつ、彼女がようやく見せた人間らしさ、そのかわいらしさに――――

一度深呼吸し、改めて計画を練る。彼女を一度休ませるための手段が、またしても流れるように、それもかなりエキセントリックなものが浮かんできた。それをやらない理由はない。

これから起きるであろう反応を頭に浮かべ少し微笑みながら、英輔はツンツン、指で彼女の背中をつつく。こちらに向いている背中に。そのかたくななな背中に。

「……」

返事はない。英輔は返事がくるまで一定間隔で杏子の背中をつつき続ける。

ツンツン。ツンツン。ツンツン。……。ツンツン。

ひたすらに一定の速度で、一定の力でつつき続ける。そして――――

ツツツン。

タイミングを変えた。

「もぅ！！　何よ！！！」

ついに杏子は反応した。こちらへ鋭く首をひねり、大声で怒鳴る。

英輔はニカッと笑う。状況にそぐわない不自然な笑み。杏子の怒りがますます増幅するのもはばからず。

「あのさぁ」

「何よっ！！」
「えっとぉ」
「だから、何よ！！」
「そのぉ」
プチ、何かが切れる音が聞こえた。気がした。彼女の怒りからイメージされた音だ。文字通り、キレた音――――
「がぁあぁあぁあぁ！！！」
頭をふりふり、いらだたしさで飽和した声を出す。
「だ　か　ら　な　ん　な　の　よ　！　！　！　！」
覚悟していた英輔もひるむほどの迫力に、もはやあの大男の比ではないプレッシャーにのけぞりそうになる。
だが……　彼は核心の笑みを浮かべた。よし、これで準備万端だ。
「さっきさ、俺がおでこで防御したの怒ってたよね」
「はぁ！？　アンタなんかに、あなた程度の存在に感情が揺るぐことなんてないわ！！」
またキャラが変わってる。情緒不安定になるまで怒りを溜め込んだ彼女には、きっと効果覿面だ。情緒不安定であっても、精神の淵にいるわけではないから安心だ。確信を上塗りしながら、計画の道を進んでいく。道がどんどん広くなって、見通しが良くなる実感を得ながら。
「それじゃあさ、俺がもしあの時そうしてなかったら？」
「そんなの！！　そんなの、あたしはこんなに怒ってな……　じゃなくて、なんとも思ってなかったわ！！」
会話が面白いくらいチグハグだ。ついつい笑いそうになるのをこらえて、詰めをしっかりと行うため、もう一度深呼吸。その空白が杏子をもう一段階上の状態へ持ち上げることを自覚しながら。
「その後、どうなってたか、想像してみて？」
「どうって！！　どうって……」
でたらめに怒鳴りながらも彼女の冷静な部分がそれに従う。三コンマ六秒の沈黙ののち、

「どうって……？」
ここで悟られても大丈夫だったけど、まだ気づいていないのは具合がいい。もう一度深呼吸をする。そして――――
「たぶん、いやぜったい。チューしてたな」
は？　と一言。そして六コンマ一秒後、フェノールフタレイン溶液のごとく赤みが広がっていって、
「っっっっぅぅ！！！！　な、ななななん、なに言ってんのよっっ！！　ちゅ、ちゅちゅちゅちゅうぅ！！　チュウですって！？　は、ははは、あはは！　ホント、なにい……」
「ちゅーしてたな」
台詞をさえぎってもう一度繰り返す。これ以上赤くなることはないようだ。
「俺がそうしていなかったら絶対チューしてた。でも君は俺がそうしていたことを怒っている。つまり……」
「つまり…？」
怒りと疑問と怒りと疑問と、彼女の頭はパンク寸前だ。とどめの頃合だな。
「君はチューしてほしかったということだ」
「っっっ！！！」
赤みが、限界に達していたと思っていたそれがさらに増した。りんごにも劣らない朱。
「君はその初チューを俺にしてほしかったわけだ」
語調を変えることなく、ただ事実を告げるかのように淡々と語る英輔。表情は深刻そうなもの。
「な、ななななんで初チューってわかっ……」
「それじゃ、ご要望にこたえよう」
杏子が言い終わる前に、散歩に誘うような口調でそう告げた。そして、そのまま、
「ちゅ」
額に、どこがはれたのかわからないほどに真っ赤になっているそ

のかわいらしい額に唇を当てた。
「きゅっ……」
気絶した。杏子は短く何か言って気を失った。そのまま前に倒れてくる彼女を抑えて、壁に支えを任せた。

「ふぅ」
杏子は完全に気を失ってしまった。英輔が彼女の体を壁に寄りかからせても静かに眠ったままだった。
英輔も後ろの壁に寄りかかって、自分の額に手を当てた。続いて両手で顔を覆った。顔を冷やすかのように、熱を冷ますかのように。
今の彼は、かろうじて見えるその耳から判断する限り、赤かった。ただひたすらに赤かった。どこまでも赤かった。
数分間そのまま固まっていた。熱は引かなかったが、彼はそのうちに顔を覆うのを終わりにした。
現れたその顔はやはり赤かった。壁の白と対称的に、赤かった。

「これじゃ大根役者だな」

自らにつぶやいた。自嘲気味に。
「この子も大根役者。大根同士だな」
一人でつぶやいた。心を落ち着けるために。
彼はさわやかな好青年に見えるが、決して女性経験が多いほうではなかった。いや、一度もなかった。
唇になんて問題外で、額にキスしたのも当然初めてだ。初チューは杏子だけではなかった。
演じている間は雰囲気で乗り切ったが、それが終わり改めて思い返して、彼は赤面している。杏子に劣らないほどに。
部屋にはっ静寂が戻っていて、意識を持っているのは英輔だけだった。杏子はただ静かに眠っていた。たまっていた感情を好きなだ

け出して、そして過度なショックで気絶して、同時に体力の限界もきて、彼女は眠ってしまった。
英輔は一人、ただ無心であろうとするが、彼の豊かな想像力が、先ほどまで起きていたこと、さらには飛躍したいろいろな想像までもを際限なく映し出していた。違うことを考えても消えることのない、自律神経によって己の意志とは関係なくつくられているのではと思うほどに、次々と映像が流れる。目を瞑っても、上を向いても消えることなく流れ続ける。

「ぐあぁあぁぁ！！！」

ついに耐え切れなくなり、彼は一人叫ぶ。杏子は目を覚まさず、そのほかにもないも音はない。沈黙が戻ってくるとまた映像が流れ始める。時間とともに色あせることはなく、むしろ鮮度の増した映像が黙々と流れる。黙々としていても、一人体を動かして気を散らしても耐えることなく流れ続けるそれ。
気絶することはなかったが、そのまま一時間、彼は自分の羞恥と戦っていた。部屋は縮んでいくが、二人はそれに劣らず近づけたという確信もときどき思い返しながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6852z/

六塞室《むそくべや》

2011年12月23日00時51分発行